

# 絶えることのない人間の狂気 : イアン・マキューアンの『黒い犬』

著者名(日)	武藤 哲郎
雑誌名	大妻女子大学紀要. 文系
巻	39
ページ	194-184
発行年	2007-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1114/00003388/">http://id.nii.ac.jp/1114/00003388/</a>



# 絶えることのない人間の狂気

——イアン・マキューアンの『黒い犬』——

武藤哲郎

## 1. はじめに

Ian McEwan (イアン・マキューアン) の『黒い犬』(*Black Dogs*, 1992) の語り手は、幼いころに両親を交通事故で失って以来、他人の親に興味を持つようになった Jeremy Harlow (ジェレミー・ハーロウ) である。彼は義理の、つまり妻の母親 June Tremain (ジューン・トレメイン) の回想録を書いている。ジューンは新婚旅行で出かけた南フランスで黒い犬に出会う。この事件をきっかけに彼女は人間がまるっきり変わってしまう。夫の Bernard (バーナード) と共に入った共産党も辞め、一人でフランスの片田舎に閉じこもって執筆活動始める。ジューンはなかなか事件の核心をジェレミーに話さない。『黒い犬』の出来事はこのように事件の周辺部をぐるぐる回るように語られ、渦が中心に向かうように、小説の最後で事件の全容が明らかになる。これはアルンダティ・ロイの『小さきものたちの神』(1997年) より先に見られる「スパイラル状の語り」である。

黒い犬に出会って以来、ジューンは夫のバーナードとは相容れない人間に変わってしまう。夫は昆虫学者で科学者である。彼は目の前にある事実しか信用しない。ジューンは結婚当初は夫と同じような考え方をしていた。しかし、その事件以来彼女は超自然的なもの、取り分け人間の狂気の存在を信じるようになった。一言で言えば、合理主義者と神秘主義者の対立である。これはマキューアンが大なり小なり好んで扱ってきた題材であるが、『黒い犬』において大きくテーマとして据えられている。

ジェレミーは1981年ポーランドで開かれた学会で魅力的な女性 Jenny Tremain (ジェニー・トレメイン) に出会う。彼は彼女と一緒に郊外にある強制収容所を訪れる。何百万というユダヤ人が虐殺された場所に立つと、人間の感情は無力化し、想像もできず同情もできなくなる。マキューアンは初期の短編小説 *First Love, Last Rites* (1975) や、それに続く *The Cement Garden* (1978) などの小説で好んで人間の狂気をテーマにしていたが、それはいわゆるある特定の「個人」の狂気であった。ホロコーストを扱うようになったのは、個人の狂気から、ある時代のある文化・文明の狂気に視野を広げたことを意味する。マキューアンが *The Ploughman's Lunch* (1985) などで題材を世界の歴史や政治に求め始めたことを考えるとごく自然なことと言える。

小説の最後で明かされる事件の全容。二匹の黒い犬は異様で、その土地で飼っているような犬とは一見して違う。(実際、マキューアンはこのような大きな犬に南フランスで出会い、思わず手に岩を持ってその犬を迂回したという。) 体がロバのように大きく、色が真っ黒で、目は赤みがかった黄色であった。まるで悪魔のようである。二匹の黒い犬は彼女に襲いかかろうとする。ジューンのお腹の中には赤ん坊がいる。彼女は、悪を前にして神になり毅然として一人で黒い犬に立ち向かう。この黒い犬がナチス・ドイツ軍が置き去りにした軍用犬であることを考えると、文化・文明の

狂気を象徴していることは明らかである。マキューアンの『黒い犬』は狂気がある特定の人間だけに見られるのではなく、世界的に見ればある時代のある文化・文明に見られる大がかりなものでもあることを我々読者に語りかける小説なのである。

## 2. スパイラル状の語り

小説の序章（Preface）ではジェレミーの生い立ちが語られる。彼は8歳の時に両親を交通事故で失い、以来他人の親に興味を抱くようになった。学校の友人が留守であることを知りながらその自宅に出かける。これは友人の両親からの暖かなもてなしを期待しているからである。ジェレミーは実の姉 Jean（ジーン）とその夫 Harper（ハーパー）、そして彼らの娘の Sally（サリー）と暮らしている。姉夫婦はろくに仕事もせず朝からジンを飲んで、サリーの面倒をジェレミーに押し付けている。彼はそれをいやとは思わない。同級生たちと付き合っているよりは、サリーと遊んでいるほうが心安らぐのである。こういったどこにも所属していないという「空虚感」は、マキューアンの初期の短編ではよく見られたテーマである。しかし、ジェレミーは、やはりそのような生活環境から抜け出たく A レベルの勉強に精を出してオックスフォード大学へと進む。大学を卒業しても姉夫婦の元へは戻らなかった。彼は30代半ばにジュニーと結婚したが、義理の親にあたるジューンとバーナードはすでに別居生活をしていた。黒い犬のことが以下のように初めて序章で語られる。

June came to God in 1946 through an encounter with evil in the form of two dogs.<sup>1</sup>

第1章（'Wiltshire'）では、白血病を患いウィルトシャーのホスピスに入院しているジューンをジェレミーが見舞う場面が書かれてある。彼女の現在の顔かたちには、1946年に大英博物館の前で撮影された写真の面影は残っていない。丸かった顔が、今では細長く、額の中心には縦に深い一本の皺（しわ）が刻まれている。

She might have grown her face to accommodate her conviction that she had confronted and been tested by a symbolic form of evil. 'No, you clot. Not symbolic!' I hear her correcting me. 'Literal, anecdotal, true. Don't you know, I was nearly killed.'<sup>2</sup>

ジューンの顔かたちはまるで悪魔の象徴に出会ったかのように一変していた。彼女は「あなた、馬鹿ね」とジェレミーを正し、「それは文字通り本当に起こったことなのよ。わからないの、私は殺されそうになったのよ」と語気を強めて言う。1987年のことである。黒い犬との出会いは、後に言及されるたびにその詳細が明らかになっていく。第3章で1989年にジェレミーはベルリンで飛行機に乗るバーナードに黒い犬が何のために訓練されていたかについてサン・モリスの市長がどんなことを言ったのか問いたす。しかし、バーナードは「またの機会に」と言って<sup>3</sup>、事件の核心は最終章へと持ち越されていく。これは、プロットのうまさまで定評のあるマキューアンが試みた新しい語りの形である。事件の核心に向かってその周辺部を時をたがえて渦を巻くようにして出来事を語る手法は、1997年のブッカー賞作品『小さきものたちの神』で「スパイラル状の語り」として注目を集めたが、マキューアンはそれ以前にこのような種類の語りを手がけていたことになる。デイヴィッド・マルコム（David Malcom）は「異なる時代の間を振り子のように揺れ動き」とこのような特異な語りに言及はしているが「スパイラル状の語り」という言葉は用いていない<sup>4</sup>。ベッ

ト・ペセトスキー (Bette Pesetsky) もこの言葉を使用していないが、『黒い犬』には、ある考えにとりつかれ苦しみ続けた人生を回想し、それを明らかにすることによって生まれる注意深く調節されたサスペンスがある」と述べている<sup>5</sup>。

ジューンは、長く住んだフランスからイギリスに戻り、トッテナム・コート・ロードのフラットも売り払って、ウィルトシャーのホスピスの小さな一室に引きこもった。白血病という難病を抱え、最後の人生を一人で過ごそうと決心したからであった。ジェレミーは彼女が必要な日用品とノートを持ってホスピスにたびたび足を運ぶ。ジューンの話聞きながら彼はメモをとり、回想録をまとめ上げていく。彼女と夫との意見の隔たりが浮き彫りになってくる。たとえば、バーナードの話からすれば、彼がジューンをデートに誘って結婚にこぎつけたとなっているが、ジューンからジェレミーが聞いたところによると、ジューンが最初にバーナードに「好みのタイプ」として目をつけ、デートに誘うように仕向けたということである。さらに、ジューンは「性行為」に取り付かれていて、正直言ってバーナードが「欲しかった」こと、あるいは、「バーナードのあそこは小さいのよ」と言ったりする<sup>6</sup>。ジューンは非常に勝気で、意志が強い印象を読者は持つ。反対に夫のバーナードはおとなしく、理知的な印象を受ける。C. バーンズ (C. Byrnes) は著書の中でユングの分析心理学 anima-animus 論 (男性の女性的な面, 女性の男性的な面) を用いて彼らの異なる性格を興味深く論述している<sup>7</sup>。バーナードもジェレミーも、急に考え方を変えて共産党を離脱しバーナードと別居生活するようになった理由を、あの黒い犬が原因と見るのに懐疑的である。しかし、ジューンは以下のように述べる。

I know that everyone thinks I've made too much of it...a young girl frightened by a couple of dogs on a country path...I'm not saying these animals were anything other than what they appeared to be. Despite what Bernard says, I don't actually believe they were Satan's familiars, ... They set me free. I discovered something.<sup>8</sup>

彼女は黒い犬に出会ったことによって、何か大切なこと、彼女の人生を変えるようなものを知ったのである。それは「神」である。黒い犬に襲われる瞬間、彼女は自分の体がまるで後光のような光に包まれたと証言している。それも詳しくは最終章へと持ち越されていく。ジェレミーが見舞った4週間後ジューンは67歳でこの世を去った。1987年、7月のことである。

### 3. 合理主義と神秘主義

ジューンが亡くなってまもなく、1989年にベルリンの壁が崩壊する。第2章 ('Berlin') では、ベルリンの壁に沿って歩きながらジェレミーは視点を変えてバーナードからジューンのこと、そして黒い犬に出会う前日に些細な喧嘩が二人の間に起きたことを聞く。南フランスの駅で二人が車を待つ間、バーナードは珍しい種類のトンボを発見する。昆虫学者である彼はそのトンボを捕まえて標本にしようとする。捕まえたトンボをジューンの手の中に入れてもらい、自分は標本にする道具をカバンから取り出そうとする。

She said, "What are you going to do?" And I said, "I want to take it home." She didn't come closer. She said, "You mean you're going to kill it." "Of course I am," I said. "It's a beauty." She went cold and logical at this point. "It's beautiful therefore you want to kill it." ...It was

jolly hot and this was not the moment to start an ethical discussion about the rights of insects. So I said, “June, do just bring it over here.” Perhaps I spoke too roughly. She took half a step away from me, and I could see she was on the point of setting it free. I said, “June, you know how much it means to me. If you let it go I’ll never forgive you.”<sup>9</sup>

確かにバーナードが言うように「昆虫の権利」をとやかく言うほうが普通だったらおかしい。しかし、美しいトンボを殺して標本にし、それを分類しようとするバーナードの行為がジューンにとってこのとき、どういうわけか耐えられなかったのである。その理由のひとつは、バーナードの人となりである。踏まえとして、一つのエピソードがある。時は前後するが、ベルリンの壁の崩壊を見ようとジェレミーとバーナードがヒースロー空港にタクシーで向かう途中、バーナードはヨーロッパ情勢について意見を述べる。それを耳にしたタクシーの運転手が反対意見を述べようとするがバーナードはそれには耳を貸さず、そそくさとターミナルに向かう。彼にしてみればタクシーの運転手ごときと議論するのはプライドが許さないのである。共産党員でありながら庶民の意見に耳を貸さないことをおかしく思ったジェレミーは「庶民性（‘common touch’）」に欠けると指摘する<sup>10</sup>。このエピソードが大きな踏まえとなっているので、ジューンがバーナードに浴びせた次の言葉には説得力がある。

“You don’t even like working-class people! You never speak to them. You don’t know what they’re like. You loathe them. You just want them arranged in neat rows like your bloody insects!”<sup>11</sup>

バーナードは共産党員でありながら庶民と交わるのをいさぎよしとしない階級意識の強い俗物、あるいは人を昆虫のようにしか考えない学者なのである。さらに、ジューンがトンボを殺すことに反対したもう一つの理由は彼女のおなかの中に新しい生命が誕生していたからだった。

‘As I was saying all this, our train pulled in with a great clatter and an awful lot of smoke and steam, and just as it came to a stop June burst into tears and threw her arms around me and broke the news that she was pregnant and that holding a little insect in her hands made her feel responsible not only for the life that was growing inside her, but for all life, and that letting me kill that beautiful dragonfly was an awful mistake and she was sure that nature would take its revenge and something terrible was going to happen to the baby.’<sup>12</sup>

ジューンはその美しいトンボを守ることが、彼女の体の中で育ちつつある生命、そればかりではなく地球上のあらゆる生命を守ることであると感ずる。そしてトンボを殺すことによって必ず自然から復讐を受け、自分の子供に何か恐ろしいことが起こると思うのである。実際娘のジェニーは生まれてきたとき、指が6本あった。

しかし、反対にバーナードは「本当の回想録を書きたいのなら…」とジェレミーに前置きして、ジューンが時として事実を捻じ曲げていることを指摘する。

‘By God, you’re so keen to know,’ he cried. ‘I’ll tell you this. My wife might have been interested in poetic truth, or spiritual truth, or her own private truth, but she didn’t give a damn for

truth, for the facts, for the kind of each other. She made patterns, she invented myths. Then she made the facts fit them.’<sup>13</sup>

‘poetic truth’は‘poetic license’（詩的表現のために間違いを許容すること）と同じ意味である。バーナードにすれば、ジューンは詩的、精神的、個人的「真実」に関心があるために、事実を無視しているということである。彼女は神話を作り上げ、それに合致するような事実を作り上げているというのがバーナードの主張である。勿論、この論点は「黒い犬」の解釈に発展していく。とりあえず、ここでバーナードとジューンが異なる種類の人間に象徴的に分類されていることが容易に理解できる。バーナードは事実以外のものは何も信じない「合理主義」であり、ジューンは反対に科学では証明されない何か超自然的なもの信じる「神秘主義」である。

マキューアンは2002年ロンドン大学ジョン・サザランド（John Sutherland）教授とのインタビューで、「*Atonement*（2001）にしても、*Enduring Love*（1997）にしても、重要なのは起こったことではなく、それを見た人間がいかに誤解してしまうかだ」と語っている<sup>14</sup>。ブライオニー（Briony）は姉と恋人との行為を誤解し、生涯その罪を償う。ジョー（Joe）はゴンドラを掴んでいた手を最初に離れたのは自分ではないかという疑念に終始悩まされる。そう考えると、黒い犬に出会ったことよりも、それをどう解釈するのが重要になってくる。*The Child in Time*（1987）でステイヴン（Stephen）は娘を失った悲しみから逃れようと街角に出て、時には幻想を見る。妻のジュリー（Julie）はそれとは反対に真っ向からその悲しみに耐えようとして一日火の消えた暖炉の前に座る。神秘主義と合理主義の不適合性はマキューアンが今まで好んで扱ってきたテーマである。それが『黒い犬』に至って、彼は真正面から取り組んでいる観がある。マキューアンは労働党に投票しても、労働党員にならなかった。合理主義を信奉しながらも、どこかそれを客観視しようとする姿勢は理解できうるものである。

バーナードはジューンが亡くなってからも、彼女のことを頻繁に思い出す。街を歩いていても彼女に似た女性を無意識に探してしまう。そうしたバーナードを、ベルリンの壁が崩壊した現場で助けるのが天国に行ったはずのジューンであった。ジェレミーと訪れたその現場は人があふれ、疲れた体を休ませるカフェも満員で座る場所もない。ところが、バーナードは突然何かにとりつかれたように走り出す。彼が向かっている方向には、トルコ人の青年が赤い旗を振っていた。「赤い旗」は共産主義を示し、ベルリンの壁がなくなったことに公然と異を唱えるものである。壁がなくなったことで大勢の人が酒に酔いしれ、その中には「誰かが何かの責任を負うべき」と感じている人々がいた。予期したとおり、背広姿の男が彼を小突き、年老いた女性が傘を振り上げて彼を罵った。そして、カギ十字の刺青をしたスキン・ヘッドの若者たちが赤い旗を持った若者に襲い掛かろうとしていた。バーナードは元共産党員であったから無意識的に赤い旗を持った若者を守ろうとしていたのである。ジェレミーは警官に助けを求めようとするが、周りに彼らの姿はない。赤い旗を持った若者は強いパチョリの匂いがし、似非共産主義者であることは疑いがない。騒ぎに乗じて受けを狙った変わり者でしかなかった。案の定、彼は急いで旗をたたみ、脱兎のごとくその場所から逃げ出す。暴漢たちは腹いせに、間に入ったバーナードを蹴り上げる。ジェレミーは彼を助けようとするが多勢に無勢である。カーナン・ライアン（Kiernan Ryan）は、このスキン・ヘッドの若者たちが時代に逆行して再びナチズムの台頭を予感させているのではないかと、「理性と民主主義の勝利を記念する出来事が、もしセビレトカゲの卵をかえしたとしたら」と述べている<sup>15</sup>。

さてそのとき、大きな声を上げて暴漢たちを罵る若い女性が現れた。彼女の男勝りの気迫は彼らをただの悪ガキ集団に矮小化させてしまうものだった。彼らは圧倒され、その場所からすずごと

退散していく。彼女の助けがなければバーナードの命はなかったであろう。彼女はジューンに瓜二つであった。

There followed the hiatus of easing Bernard in, and thanks and farewells and thanks again during which I hoped he would at last take a look at his guardian angel, the incarnation of June.<sup>16</sup>

ジューンが亡くなって以来バーナードは、彼女が予測したとおりに世界が動いていることを目の当たりにする。ベルリンの壁の崩壊もそのよい例である。機会があれば彼は街角でジューンに似た女性を探すようになる。これはジューンが再び彼の前に現れて彼が間違っていたというメッセージを伝えてもらいたかったからである。ジャック・スレイ・ジュニア (Jack Slay, Jr.) は彼らの関係が冷戦時代のヨーロッパを映し出していると述べている。

Their relationship becomes an obvious representation of post war Europe, a combination of love and hate, politics and sentiment, and their marriage, appropriately, spans the cold war, ending only when June dies in 1987.<sup>17</sup>

マキューアンはインタビューで「神秘主義と合理主義、どちらに共感するか？」の質問に次のように答えている。

Even for atheist, the question of faith has to be an issue of importance. I regard irrational belief as being the essence of faith. It's also an enduring quality of being human—perhaps even written into our nature. No amount of science or logic will shift it. We are all magical thinkers one way or another.<sup>18</sup>

彼は「人間である以上、多かれ少なかれ不思議な考え方をするものだ」と神秘主義に傾いている発言を残している。

#### 4. ホロコースト

第3章 ('Majdanek. Les Salces. St Maurice de Navacelles 1989') の前半は、1981年にジェレミーが文化交流の一環でポーランドを訪れる話が語られる。そこで現在の妻のジェニーに出会う。美しく気取った女性であったが、彼は彼女にしだいに惹かれていく。ジェニーはマジダナックにある強制収容所を見に行きたいと、彼の同行を頼む。とても女性一人では行けない所であったからである。以前収容所を見たジェレミーは行く気がしなかったが、魅力的な女性の頼みなので同行する。収容所の入り口に立った二人は「多数のポーランド人、リトアニア人、ロシア人、フランス人、イギリス人そしてアメリカ人がここで亡くなった」という掲示板を見る。ジェニーは次のように囁く。

'No mention of the Jews. See? It still goes on. And it's official.' Then she added, more to herself, 'The black dogs.'<sup>19</sup>

ユダヤ人の名前がないことから、今でもその収容所が公的に稼働しているとジェニーは言っている

る<sup>20</sup>。そして最後に「黒い犬」と囁く。黒い犬の意味は、母親のジューンから娘に伝わっていたのである。バーナードはベルリンからロンドンに戻る飛行機に乗る前に次のようにジェレミーに語る。

So June's idea was that if one dog was a personal depression, two dogs were a kind of cultural depression, civilisation's worst moods.<sup>21</sup>

この章では、最終章で黒い犬にジューンが会う前に、文化・文明の狂気が語られている。ナチス・ドイツ軍がユダヤ人を大量に虐殺したホロコーストである。収容所の小屋を見て回ると、何千何万という靴が針金でできたかごの中に入れてあった。別の小屋では床の上にたくさんの靴が散乱していた。大人用の長靴のとなりに小さな子供用の靴が塵の中から出ていた。生命が屑と化していった現場である。何十万、何百万という、その途方もない数が人間の適切な想像、同情、そして推測を拒んでしまう。悲惨なものを見た反動からか、彼らは学会へは戻らず郊外にある美しい町のホテルに数日滞在し、その10ヵ月後彼らは結婚する。

さて、時は再びバーナードを空港で見送ったジェレミーに戻る。彼は南フランスにあるかつてジューンが住んでいた別荘に向かう。ジェニーと子供たちが来る前に少し片付けておこうと思ったからである。真っ暗な建物の中で、彼はさそりに刺されそうになる。ジューンの亡霊が出てきて、「私が助けたのよ」と言えば、バーナードが横から「そんな非科学的なことを言って」と、横槍を入れる。二人の会話に辟易したジェレミーはリュックを担いで徒歩旅行に出かける。目指すはジューンとバーナードが行った大きな墓石ドルメン（'dolemen'）である。そこの近くのサン・モリスのホテルで女主人に黒い犬のことを聞くためでもある。夕食になって、食堂には、パリから来た女性と、父親、母親そして息子の一組の家族がいた。父親が子供に暴力を振るうのを見て、ジェレミーは思わず立ち上がり、父親のことを「獣」と呼んでしまう。早くから両親をなくした自分自身の孤独感、両親から常に暴力を振るわれていたサリーの姿が重なったのであろう。外に出たジェレミーは、力いっぱい父親を殴りつけ、倒れた彼を夢中で蹴飛ばしていた。もしパリから来た女性が次のように叫ばなければ、彼は父親を殺していたかもしれない。

'Monsieur. Je vous prie. Ca suffit.'<sup>22</sup>

'Ca suffit'という言葉は最終章でも、ジューンが黒い犬に向かって言っている。行儀の悪い犬を諭す「もう、よしなさい」と言う意味の言葉である。二人の女性が同じ言葉を場面を違えて言うのは偶然ではない。マキューアンの入念な意図がそこにはある。これらはこだまのように呼応し、人間誰しもが狂気を持つことを暗示している。

## 5. 黒い犬

1944年ロンドンのブルームズベリーで出会ったジューンとバーナードは、翌年結婚し1946年夏に大戦が終わって間もないフランスとイタリアに新婚旅行に出かけた。彼らはドルメンを見て、サン・モリスにあるホテルに泊まる。翌日彼らが別々の道を歩みだすことも知らずに。最終章（'St Maurice de Navacelles 1946'）では、ついにジューンが黒い犬に出会う。

翌日ホテルを出た彼らはジグザグの山道を登り始める。最初は一緒に歩いていた二人だが、数日前のトンボの一件もあり、いつしかジューンが先になって歩き始め、バーナードは遅れがちになっ



た。急な曲がり角を曲がった彼女は前方 100 ヤードに二頭のロバを見かけた。再び見るとそれはロバではなく、とてつもなく大きな黒い犬であった。彼女はバーナードが追いついてくれることを願った。犬たちは首輪をしていないし、主人たちも見えない。飼われている犬たちもこの地方ではそんなに大きくない。彼女にとって犬たちは何か「共通の目的」を持っているような、何か「亡霊」のように思えた。

二頭のうちの一头が彼女を認め近づいてくる。腹を空かしているようだった。とてつもない大きさ、そして真っ黒な体、そしてピンク色の舌、この人里離れた地域では異様であった。後ろを振り返るがバーナードはいない。実際彼は 300 ヤード後方で靴紐を結んでいた。目を転じると珍しい毛虫の列を見かける。昆虫学者の興味がまたわき、スケッチブックを取り出して描き始める。ジューンの窮地をここでも救ってやれないのである。犬たちはもう 50 ヤードの距離に迫っていた。彼女は走ろうとはせず、ゆっくりと後ずさりした。バーナードの名前を大きな声で何度か呼ぶが、虚しく響くだけで、犬たちは速度を速めて彼女に近づいてくる。とうとう距離は 20 ヤードになってしまった。黒い唇から流れる唾液にはハエがたかり、目は赤みがかかった黄色でギロギロしていた。このとき彼女は、悪を前にして神の存在を認識するのである。

She tried to find the space within her for the presence of God and thought she discerned the faintest of outlines, a significant emptiness she had never noticed before, at the back of her skull. It seemed to lift and flow upwards and outwards, streaming suddenly into an oval penumbra many feet high, an envelope of rippling energy, or, as she tried to explain it later, of 'coloured invisible light' that surrounded her and contained her. If this was God, it was also, incontestably, herself.<sup>23</sup>

彼女を包み込んだ「色のついた見えない光」はまるで後光のようであった。悪を目の前にして、彼女は神になったのである。そして、悪に毅然と立ち向かう。何か武器になるものはと探して、そばにあった石を拾う。そしてリュックからはペンナイフを取り出す。石を右手に持ち替えて投げつけるが犬たちには当たらない。犬たちはすでに至近距離に近付いており、木を背にした彼女はもう後ろには下げられない。彼女はリュックを体の前に抱えて、右手にナイフに持ち替えた。恐怖を通り越して怒りに震えた彼女は、「ああー」と大きな声を張り上げて犬に突き進んでいった。犬も同時に飛び掛ってくる。リュックに噛み付いた大きなほうの犬の腹をナイフを持った右手で突き上げた。「キャン」と小さな鳴き声をあげた犬を彼女は何度か突き刺して、勢い余って道端に倒れこむ。気が付いてみると二匹の犬は彼女から遠ざかっていった。15 分後、何も知らないバーナードは道端に座り込んでいるジューンを見つめる。

もうこれ以上旅行は続けられないといったジューンを伴って、バーナードは昨日泊まったホテルに引き返す。女主人のオーリアック夫人 (Mme Auriac) は状況を聞いてすぐ市長を呼びに行かせた。市長の語る話から、彼らはこの村が大戦当時連合軍に情報を提供していたことを知る。しかし、誰かが情報を漏らしたらしく、市民軍がやってきて、協力していた男を逮捕してリヨンに尋問のために連れて行った。まもなくその村にはゲシュタポが大きな醜い犬を連れてやって来た。この犬たちがどんな訓練を施されていたのかを市長が話そうとするとオーリアック夫人がそれをさえぎる。それは 1944 年のことだった。この村にダニエル・バートランド (Danielle Bertrand) という女性が住み着くようになる。以前ここに住んでいたバートランド夫人は自分の姪に当たる人間がいることを言っていなかった。当然、村人は彼女に不信感を抱いていた。そして、ある夜、服を引き裂か

れ、額を切られ、鼻から血を流した彼女が家から走って出てきて村人に助けを求めた。この若い女性はゲシュタポに強姦されたという話である。ところが、市長の知り合いが窓から彼女が椅子に縛り付けられるのを見ていた。そして強姦したのは人間ではなかったことを。しかし、オーリアック夫人はこの話を飲んだくれのたわごととして、まったく信じてはいなかった。

Mme Auriac slapped the table hard. 'Hector, I'm saying this to you now. I will not have this story told here...'

But Hector addressed himself to Bernard. 'It wasn't the Gestapo who raped her. They used...'<sup>24</sup>

連合軍がヨーロッパ大陸に侵攻して来たとき、ゲシュタポはこの村にこの犬たちを置き去りにして、北方に退却した。以来、犬たちはこの土地の羊を食べて生きながらえていたのである。市長は早速村人を出して、この二頭の犬を射殺すると明言したが、何故か村人は出て行かなかった。ジューンとバーナードは旅行を取りやめてイギリスに戻る。彼らはこの事件以来別々の人生を歩むのである。

## 6. おわりに

ミチコ・カクタニ (Michiko Kakutani) は、実際ジューンは黒い犬に出会ったのか、あるいはそれは彼女の人生観を要約する都合の良い作り話なのか判断が付かないと述べている。というのは、今まで数多くの小説においてマキューアンが読者を気付かないうちに登場人物の幻想と現実が入り混じる潜在意識の中に引き込んでいるからである。しかし、それでもカクタニは象徴としての黒い犬を以下のように述べている。

June's encounter with the Gestapo dogs and Bernard's confrontation with neo-Nazi thugs at the Berlin wall seem means as metaphors for Europe's condition, for the fact that its post-cold war future remains ineluctably linked to its dark past in World War II.<sup>25</sup>

C. パーンズは次のように心理学的に見た黒い犬を述べている。

The black dogs are a powerful symbol from the universal unconscious. Black usually denotes death, the shadow or the evil side of the psyche and dogs or other dangerous animals stand for man's animal nature, his instincts and uncivilized impulses.<sup>26</sup>

黒い犬は「人間の動物的な本能、その残虐的な衝動」を象徴している。カクタニが述べているように、それは冷戦後の未来と結びついている第二次大戦中の「暗い過去」なのである。そして、ジャック・スレイ・ジュニアはそれが形を変えていつの時代にも存在することを指摘している。

What McEwan so effortlessly demonstrates with this novel is that evil is a continuous, universal entity; it exists everywhere, in all forms, at all times.<sup>27</sup>

マキューアンはジューンが会った黒い犬によって、個人的な人間の狂気ではなく、文化・文明的な人間の狂気を描きたかった。ナチス・ドイツ軍のような狂気が、またいつの日かヨーロッパに舞い戻ってくるかもしれないと予告して小説の最後を結んでいる。実際その予告どおり、数年後ユーゴスラビアで第二次大戦後最悪のボスニア・ヘルツェゴビナ紛争が起こり、2005年にはマキューアンは新たに狂気をテーマに『土曜日』を出版している。

They [the black dogs] are running down the path into the Gorge of the Vis, the bigger one trailing blood on the white stones. They are crossing the shadow line and going deeper where the sun never reaches, ...fading as they move into the foothills of the mountains from where they will return to haunt us, somewhere in Europe, in another time.<sup>28</sup>

[注]

1. *Black Dogs*, p. 19.
2. *Ibid.*, p. 28.
3. *Ibid.*, p. 104-5.
4. *Understanding Ian McEwan*, pp. 139-140.
5. 'Irreconcilable Passions'.
6. *Black Dogs*, p. 32.
7. *The Works Of Ian McEwan*, p. 235.
8. *Black Dogs*, p. 59.
9. *Ibid.*, p. 76.
10. *Ibid.*, p. 73-4.
11. *Ibid.*, p. 77.
12. *Ibid.*, p. 78.
13. *Ibid.*, p. 86.
14. 'Life was clearly too interesting in the war'.
15. *Ian McEwan*, p. 61.
16. *Black Dogs*, p. 100.
17. *Ian McEwan*, p. 142.
18. 'Untitled'.
19. *Black Dogs*, p. 109-110.
20. C. パーンズによれば、これはマキューアンの調査の間違いらしい。実際には次のように掲示版にはユダヤ人の名がある。  
'Some 235,000 prisoners died in the camp, among them 48% Jews, 31% Poles, 16% Nationals of the Soviet Union, 5% from other nations.'
21. *Black Dogs*, p. 104.
22. *Ibid.*, p. 131.
23. *Ibid.*, p. 149-150.
24. *Ibid.*, p. 160.
25. 'How a Family Story Describes Europe'.
26. *The Work Of Ian McEwan*, p. 243.
27. *Ian McEwan*, p. 145.
28. *Black Dogs*, p. 173-4.

[作品]

- McEwan, Ian. *Atonement*, Jonathan Cape, 2001.  
*Ibid.*, *Black Dogs*, Jonathan Cape, 1992.  
*Ibid.*, *Enduring Love*, Jonathan Cape, 1997.  
*Ibid.*, *First Love, First Rites*, Vintage International, 1972.  
*Ibid.*, *Saturday*, Nan A. Talese, 2005.  
*Ibid.*, *The Cement Garden*, Vintage International, 1978.  
*Ibid.*, *The Child in Time*, Vintage, 1987.  
*Ibid.*, *The Ploughman's Lunch*, Pan Books, 1989.

[参考文献]

- Byrnes, C. *The Work Of Ian McEwan : A Psychodynamic Approach*, Paupers' Press, 2002.  
Malcom, David. *Understanding Ian McEwan*, University of South Carolina Press, 2002.  
Ryan, Kiernan. *Ian McEwan*, Northcote House, 1994.  
Slay, Jack, Jr. *Ian McEwan*, Twayne Publishers, 1996.

[批評]

- Kakutani, Michiko. 'How a Family Story Describes Europe', *New York Times*, 3 November, 1992.  
Pesetsky, Bette. 'Irreconcilable Passions,' *New York Review of Books*, 8 Nov., 1992.

[インタビュー]

- Sutherland, John. 'Life was clearly too interesting in the war,' 3 Jan., 2002.  
'Untitled', boldtype, *Random House*, March 1998.